



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大学校舎における学びと知識・情報のネットワーク：北海道大学留学生センターの設計理念
Author(s)	柳町, 智治
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 14, 1-14
Issue Date	2010-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46739
Type	departmental bulletin paper
File Information	JISC14_001.pdf



大学校舎における学びと知識・情報のネットワーク

— 北海道大学留学生センターの設計理念 —

柳 町 智 治

要 旨

北海道大学留学生センターの校舎は、1994年の竣工以来、北海道大学に在籍する外国人学生や研究者の日本語学習や修学生活支援の舞台となってきたが、2010年7月の学内組織改編で留学生センターが「国際本部」に組み入れられたことに伴い、2011年4月より工学部Q棟に移転することとなった。本稿では、過去16年にわたり、北大の外国人コミュニティに多大の貢献をしてきた同校舎について、建設当時の資料等をもとに、その設計理念や建物と学びの関係を検討する。具体的には、センター建物の中央に配置された吹き抜けラウンジ、階段、個室の開口部等の開放的な平面プランが内部の「見通しの良さ」を生み出し、利用者が建物内のインフォーマル、フォーマルな知識、情報、活動のネットワークに自らを位置づけることが可能になっていたことを示す。

〔キーワード〕 留学生センター、校舎、設計、理念、知識・情報のネットワーク

1. はじめに

北海道大学留学生センターの校舎（北8条西8丁目）は、キャンパスの南端、クラーク会館の西隣りに位置する、延床面積わずか1,500平米ほどの小さな2階建ての建物である（図1）。この校舎は、その竣工以来、北海道大学に在籍する外国人学生や研究者の日本語学習、修学生活支援の舞台となってきた。ところが、留学生センターは、2010年7月の学内組織改編によって、新たに設置された「国際本部」に組み入れられ、それと平行して、2011年4月より事務組



図1：留学生センター

織の国際支援課、国際連携課とともに工学部Q棟（北13条西8丁目）に移転することとなった。

筆者は1998年に北大に着任して以来、これまで12年半にわたって留学生センター校舎で教育、研究、校務に従事する機会を得たのだが、残念ながら、今年度がこの校舎を使用する最後の年になる。これまで留学生センター校舎を「ホーム」としてきた多くの学生や教職員同様、私もこの建物に大変な愛着をもっている。そこで、長年お世話になった者のひとりとして、この校舎が多くの人々のアカデミックな活動を支えてくれたことに対して感謝し、トリビュートとして本稿を書き残しておきたいと思う。今回の移転の前に、あらためて留学生センターの校舎をつぶさに観察したり、建築当時の関係者にお話をうかがったりする機会があり、そうした作業を通してこの校舎をめぐるいくつかの興味深い事実を発見し、若干の考察をすることができた。それらをこの校舎に関わった人々と共有できればと思う。

2. 留学生センター校舎の外観：「三姉妹」の設計趣旨

留学生センターは1994年に竣工した建物だが、それ以外にも、ちょうど同じ時期に建設され筆者が個人的に好感をもっている建物が北大のキャンパスにあと二つほどある。工学部南端の大野池に寄り添うように立つ「ファカルティハウス エンレイソウ」（1995年竣工、図2）と、農学部農場の西側に位置する留学生用宿舎「桑園国際交流会館」（夫婦用および家族用のA～D棟、1996～97年竣工、図3）である。留学生センターの竣工後わずか3年の間に次々と完成しているこれらの建物と留学生センターは、およそ大学の建物らしくない個性的なたたずまいをもち、小ぶりで周囲の緑に見事に溶け込んでいるという共通項をもっている。「エンレイソウ」と「留学生センター」は2階建て、「桑園国際交流会館」は2～4階建てが混在するデザインになっていて、いずれも低層の建築であり、「留学生センター」と「桑園国際交流会館」は三角屋根をもつ民家風の意匠となっている。この三つの建物群は「三姉妹」と言ってよいほど似た雰囲気をもっている。

実は、「三姉妹」には共通点がある。一つあり、建物のコンセプトや構



図2：エンレイソウ

想を決める基本設計の作業に当時の大学施設課の成田課長補佐という人物が中心に関わっている。つまり、「三姉妹」には「生みの親」がいたことになる。三棟が典型的な大学の施設とは異なる独特の印象を見る人に与えるのも、成田氏が共通の意図



図3：桑園国際交流会館(夫婦・家族棟)

や狙いをもって基本設計にあたったためかもしれない。そこで、筆者は同氏にお話をうかがいたいと思い、施設課に連絡をとったのだが、大変残念なことに、氏は数年ほど前、退職を前にご病気で亡くなれたことを知らされる。今となっては、これらの建物を氏がどのような願いを込めて設計されたのか直接お聞きすることはできず、大学に残っている当時の建築資料や成田氏といっしょに建設に携わった人々のお話をもとに推測するしかない。

大学の施設課から入手した三棟の建築書類の「設計趣旨」を見てみると、各施設の外観について以下のような記述がある¹⁾。

- ・「外観デザインは（中略）周辺にある旧昆虫学教室や旧農学部図書館などの北海道大学の歴史を語る施設との調和を図るため、切妻風の屋根を取り入れている。」（留学生センター）
- ・「構内のほぼ中央で、自然との調和を図り、環境にマッチするよう、自然的なアールと造られた直線で構成している。（中略）1階の床は、周りの地盤より低くし、目の高さを地面の高さをできるだけ近づけることにより、自然の中にいるような感覚を抱き…」（エンレイソウ）
- ・「外観は、クラーク教頭時代の校舎のイメージのもとに、切妻屋根（中略）等を採用したデザインにより、往事を偲ぶ雰囲気を狙った」（国際交流会館夫婦棟）
- ・「建物の一部を2階建、3階建とすることにより建物間の圧迫感を和らげ、空間に開放感を与えた。外観は（中略）日本の住宅をイメージして屋根は切妻とし…」（国際交流会館家族棟）

以上の記述は大きく2点にまとめられる。まず、三棟の建設にあたっては、

建物と周囲の自然環境との調和を図り、威圧感を与えることがないように配慮されていたこと。さらに、北大の歴史的建造物あるいは和風の住宅を連想させるよう、切妻あるいは切妻風の屋根が採用されたという点である。ここで一点補足しておく、後者の和風の切妻屋根のデザインについては、成田氏といっしょに設計に携わった方から、氏はかねがね、故郷である東北地方北部の家屋の三角屋根に対する想いを語られていたというお話をうかがっている。設計趣旨に盛り込まれた「日本の住宅のイメージ」とは、同氏の原風景でもある北東北から北海道にかけての雪国の民家のそれでもあったのだろう。

このように、留学生センターの設計理念は、90年代半ばの同時期に建設された「エンレイソウ」、「桑園国際交流会館」という施設でも共有されていたことが当時の建設資料から明らかになった。以下の項では、留学生センター校舎の内部について検討していく作業を通して、この建物がどのように北大の国際コミュニティに貢献することができたのか、その点を見ていくことにしよう。

3. 留学生センター校舎の内部：情報や活動へのアクセス

内田樹（2010）は自身の勤務する大学の校舎をめぐる興味深いエッセイをブログで公開している。内田によれば、学校の校舎の一義的な目的は、「そこで学ぶ人たちの知性のパフォーマンスを向上させること」だという。たとえば、「声が気持ち悪く残響する教室」にいと、授業しているときにどんどんテンションが下がってくるのがわかり、自分が「バカみたい」に思えるが、同じ残響でもその微妙な遅れによっては、逆に「言っていることがすごく賢そうに聞こえる」効果があるという。さらに内田は、「自分がバカみたいに思える」残響時間と、「自分が賢く思える」残響時間の差は僅かなものだが、「そういうことを勘定に入れて建物の設計をしている人はきわめて少ない」という。そして、自身が勤務する私立大学のキャンパスと校舎を設計したヴォーリズの建築が、大学での学ぶという機会を通して「そこで生きる人々に人間的成熟を要求する」ものであったことに感心し共鳴する。

私は建築や設計の専門家ではないが、留学生センターで長い時間を過ごした者として、この校舎も内田の言う「そこで学ぶ人たちの知性のパフォーマンスを向上させる」建築であるように思う。その場所に集う者の学びを

最大限に実現したいという願いが建物の設計に込められているように感じられる点で、ヴォーリズの思想と相通じるところがあると思えてならない。決してヴォーリズのような著名な建築家によって計画されたわけではないが、留学生センターとはどのような場所であるべきかをめぐる深い思索と強い信念があつて構想された校舎であるように思えるのだ。

内田は「知性のパフォーマンスを向上させる」校舎の要素として残響を挙げていたが、留学生センター校舎の場合、そうした要素は「見通しの良さ」だと私は思う。留学生センターがキャンパスの他の校舎と明らかに違うのは、外観のデザインもさることながら、建物内部の「見通しの良さ」なのである。建物内部のどこにいても視界がひらけ、遠くまで視線が届く。ひとつの大きな空間のような構成になっているので、内部の別の場所での活動と隔絶されているという感じがあまりしない。「どこにいても家族の気配が感じられる家」という表現が一般住宅の設計をめぐって使われることがあるが、それに近い。この「見通しのよさ」は、玄関を入った先にある2階まで吹き抜けになっている大きなラウンジ（図4）、ラウンジに面して突き出るように設置された一対の階段（図5）、そして各部屋のドアの開閉口（図6）²⁾の存在によるところが大きいといえる。このことを以下に示すことにしよう。

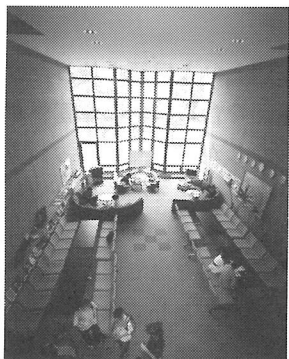


図4：1階ラウンジ



図5：東階段からラウンジと西階段を望む



図6：教室ドアの開閉口

センター建物を使う者は、その「見通しの良さ」によって、移動の途中で、センター内に流通している多くの情報やそこで起きているさまざまな活動にアクセスすることができる。たとえば、玄関を入った吹き抜け手前

の左右に一か所ずつ設置されている階段のうち左手（東側）の階段を上がる者は、まず1階の国際支援課の事務室全体を俯瞰できる。次に、途中の踊り場に達するまでに、向かいに見える1階と2階にある教室の内部の様子が入り口ドアにはめこまれた大きなガラス窓を通して視界に入ってくる。さらに、踊り場はちょうどオペラ劇場のバルコニー席のようにラウンジ空間に突き出る形で設計されているので、そこでラウンジ全体の活動が一望でき、そして、2階に達した時点でいくつかの教員室の灯り、2階ラウンジに集う人々の様子、さらには、廊下の先にある教室の内部の様子を目にすることになる。階段を上り下りするほんの十秒か二十秒の間にこれだけ多くのことを観察し、情報として得ることになる。また、移動している者がさまざまな情報や活動にアクセスできるという事実は、階段を上り下りしたり廊下を歩いたりラウンジにいる自分自身も他者にとっての情報となっていることを意味する。普通の講義棟の階段が建物内の情報や活動と切り離された空間になっているのといかに対照的であるかがわかるだろう。私自身、センター内のわずかな距離を移動する間に、「あのグループの学生は最近よくいっしょに勉強しているな」、「Aさん、お祈りコーナーから出てきた。イスラム教徒だったんだ」、「B先生、パワーポイントを使ってあんな授業をしてる。いいアイデアだな」、「教室の机の配置をこう変えてみるのも良さそうだな」等々、さまざまな知識情報に接することができるのである。

留学生センターで日々行われているのは、日本語という言語を使ったコミュニケーションの教育であり学習である。日本語を含め、言葉を習得するためには一人で机に向かって勉強すべきこともたしかに多くある。ただ、言葉を学んだり使用したりすることは、他者の存在があって初めて可能になる。そして、学習者や教師間の知識・情報ネットワークには、フォーマルなものもインフォーマルなものもあり、学習者は教室だけでなく教室外の外でもお互いや教師や周囲の日本人を学習のリソースとして取り込みながら言葉を習得している（上野 2004、柳町 2006、2009）。学習者にとってそうしたフォーマル、インフォーマルなネットワークから切り離されてしまうことは、言葉を学び使うことの機会の喪失を意味する。広い意味での言葉の学習とは、学習者がさまざまな実践や活動のコミュニティーにどれだけ参加できているのかを含んでいるからだ。その点、留学生センター建物は、内部の「見通しの良さ」によって、利用者がそこに流通している

情報や行われている活動にアクセスし、そのネットワークに自らを位置づけることが容易になっているという点において、学習環境のデザインとしてすぐれたものであるということがいえるだろう³⁾。

4. 留学生センターにおける学び

留学生センター内部の「見通しの良さ」に施設中央のラウンジと吹き抜け空間が大きく関わっていることは上に書いたとおりだが、実は、留学生センターのラウンジのように、玄関を入ってすぐの場所に人々が集う大きな空間があるというのは、通常、学校校舎の設計では採られることのない平面プランである。留学センターの場合もそうだが、平面の中央にそうした大空間があるということは、その左右両側に教室や教員研究室を配置することを意味する。そうすると、利用者はその広い共有スペースをまたぐ形で建物内を移動することになり、長い距離を歩かないといけなくなるだけでなく、動線が直線にならず、交叉したり複雑になったりしてしまう。一言でいって、校舎としては非常に効率の悪いプランになってしまうのだ。授業が行われる建物の場合にはむしろ、廊下にそって教室を配置することが合理的であり、事実、そういうデザインにするのが一般的だ（小中高校の校舎、あるいは北大の「高等教育推進機構」の校舎を思い浮かべていただきたい）。

ところが、逆に、中央に人々が集うスペースを置いた方が建設目的により適うタイプの建物もある。集会施設や福利厚生施設がそれである。北海道大学の建物でいえば、「学術交流会館」や「クラーク会館」がこのカテゴリーに含まれる。どちらの建物も、正面玄関を入ったところに人々が集う広いスペースがあり、その空間を挟む形で両端に個室やホールが配置されている。学術交流会館は文字通り学術活動が行われる集会施設であり、クラーク会館は学生会館、つまり学生のための福利厚生施設の日本におけるはしりであり、集会施設としての性格をもっている。両者とも、人々が集い憩う場所であるから、講義棟のような効率を重視した設計とはなっていない。むしろ、中央に「広場」を配置し人々の動線をあえて交わせる方が建物の趣旨からしてより望ましい。

では、建物内部の部屋のほとんどが教室と教員研究室であり、毎日百名単位の留学生が日本語や他の授業を受けに来る留学生センターの平面プランが典型的な講義棟のそれではなく、学術交流会館やクラーク会館により近

いものとなっているという事実は、いったいどういうことなのだろうか。こう推測することもできるのではないか。つまり、そもそも留学生センターは、授業が行われる講義棟としてよりは、留学生のための集会施設あるいは福利厚生施設として機能すること、さらにいえば「交流」の場を提供することをより重視して設計されたのだ、と。

実は、留学生センター校舎は教室と教員室が収まる単なる教育研究棟ではないという推測があながち的外れではないことを示唆する記述が留学生センターの「設計趣旨」の冒頭に見られる。

この施設は、留学生の日本語教育をはじめ生活や異文化適応の指導・助言および交流の場として、構内の南地区に位置し、正門から学術交流会館・ポプラ会館・クラーク会館と続く国際交流の一角をなしている。

留学生センターが「正門から学術交流会館・ポプラ会館・クラーク会館と続く国際交流の一角」をなすという説明は、設計者が留学生センターをこれらの建物群と同じカテゴリーの施設として構想していたことを物語っている。「ポプラ会館」とは、今は「北海道大学アイヌ・先住民研究センター」が入居している施設で、中央ローンの南側に位置する2階建ての小さな建物である。大学の厚生施設として建てられ、つい最近まで訪問者用の宿泊施設として使われていた。学術交流会館、クラーク会館と同様、講義演習用の建物ではない。留学生センターの「設計趣旨」によれば、留学生センターはこれらの集会施設、福利厚生施設とともに「国際交流」地域の一角を形成するとなっている。つまり、講義棟というよりはむしろ交流施設の性格を強くもつ建物として計画されていたのである。

既に前項で述べた通り、留学生センターで行われている、言語を学び使用するという知的活動は、他者とのインタラクションをどのように組織化していくかということを意味し、そこには、どのように他者とつながっていくかということも含まれる。「知識や技術とは、個人の頭の中やデータベース、テキストの中にあるのではなく、様々なインフォーマル、フォーマルなネットワークの中にある」（上野 2004）からだ。留学生が教室で授業を受けるだけの空間では、学習環境として十分に機能するとは言えない。講義室の広さや数といった物理的な問題もさることながら、全学の留

学生にとっての「つなぎめ」としての機能をどのように発揮するかが、留学生センターという場所には求められている⁴⁾。そして、こうした学びが起きることを設計者自身が予期していたかのごとく、留学生センター内部は計画されていた。「学習とは、個体内に新たな知識や情報が蓄積されることだけでなく、個体間の境界を超えた、人々の知識やネットワークの形成でありそこへのアクセスである」という視点を支える設計理念があり、そうした学習にふさわしい空間のデザインがこの建物には埋め込まれていたのである⁵⁾。

5. さいごに

2010年11月の時点で北海道大学の留学生数は約1,400名に達し、留学生センターで日本語を受講している学生もそれにつれて増加している。以前と比べるとークラスあたりの受講生が多くなり、教室の狭隘化が深刻な問題となってきている。もし留学生センターのラウンジと吹き抜け部分がなければ、その分いくつかの教室が確保でき、ここ数年の教室不足の問題のいくらかは解消できていただろう。しかし一方で、もしこの空間がなければ、留学生センターは、留学生が教室で授業を受けに来て授業が終われば帰るだけの場所になり、集いや相互支援の場としての機能を失っていた。いくつかの教室と引き換えに、センター建物の「見通しのよさ」や知識情報のネットワークの形成とそこへのアクセスの機会を失っていたことになる。

笠原敏彦（2010）によると、かつて、第二次大戦の空爆により破壊された英国議会の議場の再建が計画された時、当時の首相チャーチルは議論の活性化を可能にするような議場の設計にとってもこだわり、結局、議員全員が座れないような狭い議場の建設を提案したという。チャーチル曰く「建物を形作るのは我々だが、その建物が後に我々を形作ることになる。議員全員を収容するような議場にすべきではない。下院での優れた議論の神髄は、軽快にやり取りができる対話スタイルにある。そのためには、小さな議場と打ち解けた雰囲気欠かせないのである」。この逸話は人々や組織と建物の関係を見事に言い表しているし、留学生センターにも当てはまる。人々や組織のあり方がどうなるかは建物が深く関わっている。議場にしても大学の校舎にしても、人々のインタラクションが可能なデザインがそこにはないといけない。留学生センターの建物がその竣工以来、多くの留学生

や外国人研究員を迎え入れ、曲がりなりにも北大の国際化の一翼を担うことができたのは、留学生センターという建物の設計思想に負うところが大きかった。講義棟らしくない講義棟を設計し建設するには、議員全員が収容できない議場を設計するのと同様、勇気がいる。留学生センター校舎は、基本設計で謳われた通り、そこを利用する者の学びの機会を「交流」という理念を通して見事に創造し支えてきたのである。

謝辞

本稿を書くにあたり、北海道日建設計、北海道大学施設部施設課、大学院工学研究科の関係諸氏より資料を送っていただいたりお話をうかがったりした。ここに記して感謝の意を表したい。最後に、留学生センターという素晴らしい学びの場、交流の場の設計にあたってくださった成田元課長補佐に感謝するとともに、氏のご冥福をお祈りする。

注

- 1) 留学生センター校舎の「設計趣旨」の全文を以下に引用しておく。

この施設は、留学生の日本語教育をはじめ生活や異文化適応の指導・助言及び交流の場として、構内の南地区に位置し、正門から学術交流会館・ポプラ会館・クラーク会館と続く国際交流の一角をなしている。近くには、中央ローンやエルムの森など緑濃い豊かな自然にもつつまれている。

外観デザインは、留学生センターの名前からくる国際協調を意識して、お互いに向き合い睦み合う姿を表現した対象形を基調としている。又、周辺にある旧昆虫学教室や旧農学部図書館などの北海道大学の歴史を語る施設との調和を図るため、切妻風の屋根を取り入れている。

平面計画は、玄関・吹き抜けのラウンジを軸に配置し、建物前面より少し下げ、奥行を感じさせながら周辺のやさしい緑を建物の中までよびこみ、中央のラウンジにおいては、各行事に南側の芝生と一体として利用が出来る空間としてある。このラウンジを中心として右にL.L教室・講義室・左に管理室・教官室を配しそれぞれにオープンの階段をラウンジに面して設け、わかりやすい

動線計画とした。

設備計画では、ラウンジに長い冬を快適な団らんの場とするため床暖方式を採用し、さらに上部には、開閉式の天窓を設けることにより、夏期間の効率の良い自然換気を可能とした。又、空調用換気扇、サーモバブル付自動スイッチによる照明制御の採用により省エネルギーを考慮している。

全体的に小柄ながらも、大きく見せる空間構成の工夫と周辺環境への調和により、快適な学習環境が広がっている。

- 2) 教室ドアの開口部は透明のガラス、教員室ドアはすりガラスになっている。なお、これらのガラスは五角形になっていて、建物外観のモチーフとなった、切妻屋根の民家や旧農学校時代の校舎のイメージが再現されている。
- 3) 実は、こうした留学生センターの「見通しの良さ」とそこでの活動の透明度が高いこととの関係は、建物内部だけの話ではない。ひとつの例は、センターの前にとめられている自転車である。自転車がとまっている様子は、「月曜日のこの時間帯は授業を受けに来ている学生が多いようだ」など、その時にセンター内で起きていることの一端を可視化する。ただ、こうした観察が可能になるのは、建物の形状や設計と無縁ではない。もし留学生センターが独立した施設に入っているのではなく、高層の校舎の一部フロアを占めている場合や、駐輪場が建物から離れて設置されている場合には、その組織で何が起きているのか、どのような活動が行われているかといった情報にはアクセスしにくくなり、以上のような観察も困難になる。
- 4) 留学生センター建物が人々の「つなぎめ」としての機能を果たすことを示す逸話をひとつ紹介したい。2002年夏に日本と韓国で共同開催されたサッカーのワールドカップの時に留学センターで起きたことは、当時を知る人々の間では今でも語り草になっている。大会期間中、1階ラウンジの正面に備え付けられたスクリーンにはその日の午後の試合が映し出され、ラウンジは母国やひいきのチームを応援する留学生をはじめ、日本人学生、教職員で埋めつくされた。日本が出場する試合ともなると、観客が1階ラウンジだけでは収まりきらず、ラウンジを見下ろす2階の通路や階段の踊り場にまで椅子が並べられ立ち見も

出るなど、センターは観戦の人々で溢れかえった。留学生センターで提供されている授業の多くは午前の時間帯に配置されているので、こうした多くの観衆の集散が授業に与えた影響は最小限に食い止められたのではないと思うが、中には試合の時間帯とちょうど重なってしまい、「授業にならない」と嘆く教員もいた。この時のことは、留学生センターという場所が授業が行われる通常の校舎としての機能をもつと同時に、そうした形での人々の集まりや活動が可能なデザインになっていたことも示している。同じような機会がたとえあったとしても、学生や教職員が一同に会し、眼前で展開されるイベントを皆で共有し一喜一憂するという体験が可能な場所と可能でない場所があるはずだ。2002年の夏にセンターの利用者が知ったのは、留学生センターという場所は、単なる校舎としてだけではなく、「convivialな（共倫的な）活動」（美馬・山内 2005）が繰り広げられる「広場」にもなるポテンシャルをもっているという事実だった。

- 5) 本稿執筆の時点で、2011年3月末の留学生センター移転後にセンター校舎がどういう形で跡地利用されるのかはわかっていない。ただ、当初の設計建設の理念と趣旨が今後も受け継がれていくことを願っている。

参考文献：

- 上野直樹（2004）「日本語学習環境のデザイン：状況論的アプローチ」『AJALT』27, 24-28
- 美馬のゆり・山内祐平（2006）『「未来の学び」をデザインする：空間・活動・共同体』東京大学出版会
- 柳町智治（2005）「教室における知識・情報のネットワーク：入門フランス語クラスでの調査から」上野直樹・ソーヤーりえこ編『文化と状況的学習：実践、言語、人工物へのアクセスのデザイン』凡人社、154-170
- 柳町智治（2009）「ハイブリッドのデザインとしての教室そして学習者」小林ミナ・衣川隆生編『日本語教育の過去・現在・未来〈第3巻〉教室』凡人社、142-160

インターネットサイト：

- 内田樹（2010）「ヴォーリズ建築 内田樹入試部長のひとり言」神戸女学

院大学ホームページ

http://kobe-college.jp/tatsuru/2010_01_000577.html

2010年11月閲覧

笠原敏彦 (2010) 「発信箱：どうせまねるなら」 毎日新聞ホームページ

<http://mainichi.jp/select/opinion/hasshinbako/archive/news/20101129ddm004070052000c.html>

2010年12月閲覧

やなぎまち ともはる (留学生センター教授)

Learning, knowledge/information networks, and university buildings: The design philosophy of the International Student Center building

Tomoharu Yanagimachi

The International Student Center (ISC) of Hokkaido University is moving from the present building to a section of the Faculty of Engineering in March 2011. This article is a tribute to the present ISC building which has made significant contributions to the international community of the university since its completion in 1994. The purpose of the article is to discuss how the philosophy embodied in the architectural plan of the building has served to improve the 'intellectual performance' of users of the Center. The building's innovative open plan has made the various activities occurring there transparent and highly visible, thereby enabling its users to situate themselves in and to gain access to the 'knowledge and information network' circulating within it.